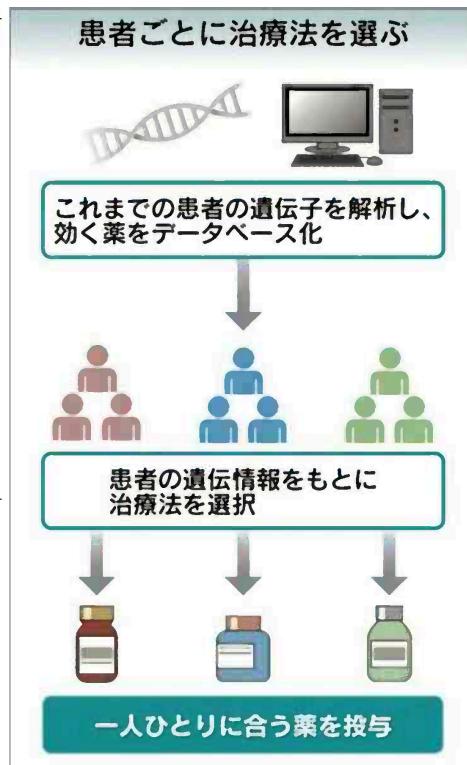


がん治療遺伝情報共有

京都大学や北海道大学など全国6大学の附属病院は、がん患者一人ひとりの遺伝情報をもとに最適な治療法を探る「個別化医療」を2019年度にも始める。がんに関する200種類以上の遺伝子の変化と投薬歴や治療効果をまとめたデータベースをつくり、精度の高い診断や効果的な治療につなげる。

京大など、投薬データ集約

患者別の「最適」探る



▼個別化医療 一人ひとりの患者の病状に応じて治療や投薬の方針を見つけ、最適の医療を施すこと。「オーダーメード医療」などとも呼ぶ。遺伝子の変化を繰り返すがんの場合、変化に伴い効く薬も変わる。がんの遺伝子を調べれば効く薬が分かり、治療の幅が広がる。遺伝子の変化と治療効果のデータを蓄積すれば、個別化医療の精度が高まる。

子が変化すると効かなくなる。遺伝子の変化の仕方によつては、別のがんに使う薬が効くようになら場合がある。ただ、遺伝子の変化を調べて効きやすい薬を選ぶには、知識や経験が必要だった。これまでも京大や北大では、普通の薬が効かない患者でがんの遺伝子を調べ、治療薬や治療法を探していた。

つた例がある。たとえば京大病院では十二指腸の遺伝子の変化を調べて肺がん薬の効果が高そうだとわかり、新たに投与してがんの進行を止められた患者がいるという。

今後は、こうしたノウハウをデータベースを通じて各大学が共有する。遺伝子の変化に関する情報を持ちながら、他ののがんの治療や海外で使う薬などが治療の候補になるかどうかを洗い出す。

がんの種類別に特定の薬を使う従来の方法に加え、これまでにない組み合わせも選択肢に入る見込みだ。

治療方針を決める。その後、一人ひとりに最適な治療法を提案し、主治医や患者の確認を経て治療に移る。標準の薬や治療法が効かない患者や、治療法が無いまれながんの患者が対象となる。

国立がん研究センターなどもがんの遺伝子の情

象は肺や大腸のかたとくに限られ、新薬の開発への参加を促すものだつた。

高齢化社会によつてきたことを背景にして、伝情報に基づくがん別化医療が国内外で

か、対をを集めている。遺伝子の年ころから一部の大学病院が診断を始め、データの蓄積を続けている。欧米人の治療成績は日本人にとっても参考になる。京大などの取り組みで日本人のデータがそろって、効果を含むデータを蓄積して診断の精度や治療の効果を高める取り組みは米国が先行している。10この注目が目追い風になる。

患者一人ひとりのがんの遺伝子を解析し、治療する。欧米人の治療成績は日本人にとっても参考になる。京大などの取り組みで日本人のデータがそろって、効果を含むデータを蓄積して診断の精度や治療の効果を高める取り組みは米国が先行している。10この注目

患者ごとにふさわしい薬を見極めれば、無駄な薬を減らせる。がん免疫療法「オプジー」をはじめとする画期的な新薬も、患者全員に効くとは限らない。適正な使い方によって、医療費の増加を抑える効果も期待できる。

京大や北大など先行して遺伝子解析に取り組む病院が協力してデータを蓄積する。岡山大学、千葉大学、佐賀大学、東京医科歯科大学の付属病院も参加する。日本医療研究開発機構が18年度までに5億5千万円程度を支援する。

これまでに京大や北大では、普通の薬が効かない患者でがんの遺伝子を調べ、治療薬や治療法を探していた。

実際に各大学の経験やひらめきが治療につながる

計画では、患者の希望に応じて遺伝子を解析し、18年度までに開発するデータベースを参考に